

読書を触発するキュレーションサービスの構築

矢田 竣太郎[†]

[†] 東京大学大学院教育学研究科

[†]shunt.yada@gmail.com

Web を利用した読書支援アプリケーションはいずれも既に読書を習慣化できている人々を志向しており、読書意欲はあっても読書に慣れていない人々を支援するものではない。そういった人々は「何を読めばよいかわからない」ことが比較的大きな障壁としてあることに着目し、読書を触発する図書推薦アプリケーションとして Serendy を開発した。本の内容に依らず利用者の関心を獲得できるよう、Twitter¹ で友人が言及した本を提示するという手法を用いた。

1 はじめに

ブックログ² や読書メーター³ など読書を支援する Web アプリケーションは多様に存在するが、いずれも読書という行為に慣れたいわゆる読書家層を志向しており、読書意欲はあっても読書に慣れていない層 (2.1 で述べる前読書家) を支援するものではない。そこで前読書家のうち経済的・時間的余裕があってなお読書に移れない者は「何を読めばよいかわからない」ことに起因することに鑑み、図書を推薦することで読書を触発する Web アプリケーション (以下、単にシステムとする) を構築しようと考えた。

本研究発表では、そのようなシステムの開発にあたり前提とした概念や理論的背景を中心に説明し (本発表論文の第 2 章)、システムの一例として考案した Serendy のユースケースと現段階で実装に至った機能を紹介したうえで (同 第 3 章)、Serendy が理論に対してどのような位置づけにあるかおよび Serendy の今後の展望を述べる (同 第 4 章)。

2 コンセプト

2.1 想定する利用者像

読書に興味はあるが、実際には読書を実践できていない人々について考えると、その制限要因にあたるものを取り除くことができれば彼らは読書を始めるだろう。彼らを便宜的に (継続的または習慣的に読書する者を読書家と表現するとして) **前読書家** と呼ぶことにしたい。前読書家はその意味で読書家になりたいという欲求を少なからず持っている、それを支援し読書家人口を増やすことは、前読書家個人だけではなく本を供給する出版界・図書館界にとっても利益がある。

そこで、前読書家と読書家との間の差異につい

て考える。現代人の読書実態調査⁴ によれば社会人や中高生が本を読まない理由⁵ として「何を読めばよいかわからない」ことが多く挙げられていた。時間的余裕のなさを除けば、前読書家が読書に至らない要因として「次に読む本」を決定できないことが大きいといえる。

習慣的に読書をするという行為は「次に読む本」を内発的な興味・関心から選ぶことで可能になる。もちろん「次に読む本」が強制的に与えられること (例えば購読型ゼミや読書会への参加) でも習慣的な読書につながるが、外的要因が取り除かれた場合、それでもなお本に対する内発的な興味・関心を持ちえなければ直ちにそのときの読書習慣は脱定着する。ここでいう内発的な興味・関心とは、本のジャンルや著者、シリーズといった、「次に読む本」を選ぶ際の手がかりになるようなものに対して主体が抱く趣向である。そうした趣向を何らかの形で抱き「次に読む本」を手にとって読むことができれば、その読書からさらなる内発的な興味・関心を生む確率も大きくなることが期待され、習慣的な読書へと前読書家を駆動するはずである。

2.2 どのように推薦するか

前読書家に「次に読む本」を手にとらせるような趣向を与える、すなわち読書を**触発**するようなシステムを考える場合、どのようなあり方が適切だろうか。触発のためにシステムは何かを提示するが、その何かは本そのものであるべきである。2.1 節の議論では「次に読む本」の選書基準を与える趣向を持たせられれば十分であるように思われるかもしれないが、いま話題のジャンルや当人が好みそうな著者の情報だけ提示されても、そこ

で前読書家は依然として「何を読めばいいのかわからない」という感想を抱くだろう。近年の猛烈な新刊点数⁶ およびこれまで人類が生産してきた膨大な図書冊数を前に、たとえ一部の書誌情報での図書の絞り込みが可能になっても読書に慣れない前読書家が一冊の本を選びとるのは難しいはずだ。したがってシステムはある分野、ある著者、あるシリーズ等を提示するのではなく、ある本を提示する。

そこでその提示の仕方が問題となる。提示された本が前読書家の興味・関心に多少なりとも関連していなくては「次に読む本」の候補たりえない。しかし前読書家は自発的に「次に読む本」を決定できない以上、その興味・関心は潜在していて前読書家自身も積極的に認識することが難しい。そのためシステムが前読書家に興味・関心の設定を求めることは有意義ではない。だが前読書家にとって提示された情報が自らの興味・関心にそぐうかどうかを判断することは容易であり、また提示のされ方によっては提示のときはじめて興味・関心を抱いたり、それが自らの興味・関心だったのだと気付いたり思い込むこともある。このときシステムは前読書家に対して、Erdelez が提示した**情報遭遇**⁷の機会を与えるものとしてあり、利用者の遭遇経験の性質次第ではシステムが前読書家の興味・関心を把握する必要なく触発が達成されることがわかる。

そこでシステムによる触発が利用者の興味・関心によらず効果を有するような条件を考える。その条件は提示する情報の内容が持つべき性質ではなく、情報および情報提示の仕方が外形的・形式的に持つべき性質として記述できる。

①**日常性** まず前読書家が「次に読む本」を選ぶ手がかりとなる興味・関心を得られるような情報遭遇はどこでなされるだろうか。積極的にそうした体験が可能になるのは書店や図書館でのブラウジング、あるいは読書会や読書好きな友人との会話などが考えられる。しかしそうした空間は既に読書や本に興味・関心が向いていることを自覚して初めて能動的な行動として参入可能な場である。前読書家は読書意欲があるといっても1日じゅう常に読書がしたいと思っているわけではなく、また本あるいは本の情報が大量にある空間を前に「何を読めばいいのかわからない」と立ちす

くんでしまう以上、例に挙げたような**本や読書を第一義的に志向する場**における情報遭遇から前読書家は遠ざかってしまう。ゆえにシステムによる情報提示は前読書家が生活を行なう極めて日常的な文脈の中でなされるべきである。これを場の**日常性**と定義する。

②**近接性** 情報の内容によらず受信者が当該情報に興味・関心を持つ場合というのはいらうだろうか。比較的大きな効果が直観的に期待できるのは情報が受信者にとって重要な人物・組織から発信される場合である。まったく同じ情報でも発信者が受信者にとって重要な存在であれば、あるいは重要とまではいかずとも少なからず近い人物であればより受け取られやすいといえるだろう。この性質を情報(発信者)の**近接性**と表現する。

③**非強迫性** 情報の内容如何にかかわらず受信者の注意を引く提示方法としては、例えば繰り返したり指向性を持たせたりすることが考えられるが、同じ情報をしつこく繰り返すことや「あなただけに特別に」といった文句を過剰に添えることはかえって受信者を不快にする。それはその情報提示が、当該情報を受信することを強要しているかのように受信者には思われてしまうからである。これは押し付けがましさと表現でき、そのような情報提示は受信者にとって一種の強要となって当人の主体性を侵害するものと受け取られるのである。したがって情報提示は押し付けがましくあってはならない。これを情報提示の**非強迫性**とする。

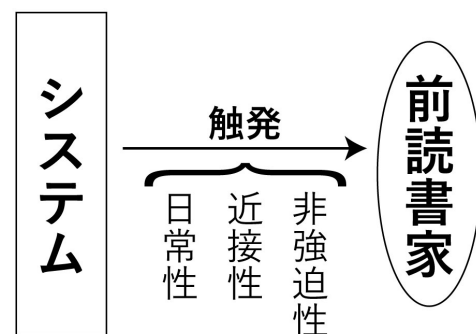


図 1: コンセプト図

本研究では、情報および情報提示の手法を持つべき以上3つの要因を触発の成功要件として重要視することとし、これをシステムにおいて実現することを考えた。

3 システムについて

3.1 仕様

2.2で言及した3つの要件(①日常性、②近接性、③非強迫性)を満たす現実の事象として本研究では以下のモデルを設定した。

前読書家が②友人と①食事で歓談中に、不意に友人が③会話に関連して本のことに言及するのを聞く

これをインターネット上での行動に置き換え、システムの機能要件として記述し直すと、

- 1 前読書家が利用する SNS で近接性の高い友人アカウントに着目
- 2 その友人の発言から関連する本の情報を抽出
- 3 抽出された本を非強迫的に前読書家にキュレーション⁸

とできよう。本研究ではこのようなシステムを目指した一例として Serendy と仮称する Web アプリケーションを開発した。

3.2 実装

開発は Ruby on Rails で行い、対象とする SNS を日本語環境の Twitter に限定した⁹。

- 1 前読書家が利用する SNS で近接性の高い友人アカウントに着目

利用者は Serendy ユーザーとして新規登録をしたあと、Twitter で興味のあるアカウントのユーザー名を登録してもらう。利用者が行なう作業はこれだけである。

- 2 その友人の発言から関連する本の情報を抽出

利用者が設定した友人アカウントの発言から書誌情報を含むものを抽出し、その発言が指す本の情報を取得するプログラムを、サーバー上でバッチ処理する。

2.1 本や読書に関する発言を識別

「本」や「読書」といった単語が含まれるかどうかによって判断する。本研究ではこれを便宜上「識別語彙」と呼び、

名詞と動詞で区別して管理することにした。利用者とする前読書家は日本語話者とし、識別語彙は日本語を扱う。

2.2 発言中の書誌情報を抽出

識別された発言において「」等で括られた文字列を書名ないし本文の引用とみなす。また、当該発言を形態素解析にかけ、人名が含まれていた場合それを著者名とみなす。

2.3 書誌情報を目録データベースで検索

抽出された書誌情報(書名・引用・著者名)をクエリとして and 結合し、Google Books の API を通じてその出力結果を取得する。

3 抽出された本を非強迫的に前読書家にキュレーション

Google Books API から取得した書誌リストの最上位1冊を元となる発言と結びつけた形式で表示し、メールで利用者に通知する。通知頻度は発言と本の組み合わせが5件以上たまった場合とし、5件をひとまとめにしてメール文面を構築する。



図 2: Serendy トップ画面

4 考察

4.1 実装の位置づけ

本研究で実装した Serendy が、第2章に対してどのような位置づけにあるかを確認したい。まず前読書家について、Serendy は積極的にアプローチしているわけではないので適切な広報が必要であるが、ユーザー登録作業以外は利用者は何もしなくてよい点で極めて利用の敷居は低く、前読書

家に対して有効であるといえる。一方、推薦の手法すなわち**触発**に関して3つの要件がいかにか担保されているだろうか。Serendyは不定期にメールで推薦図書リストを通知するので①**日常性**を有する。②**近接性**は利用者自らが興味ある友人アカウントを登録することで実現されているが、これは多少前読書家にとって負荷が大きい作業なので、将来的にはSerendy側が自動で友人アカウントをある程度絞り込んで提示するような仕組みを設けたい。③**非強迫性**についてはメール通知の頻度やメールの文体の点から一定程度確保されているものと考えられるが、あまりに淡泊すぎても前読書家の注意を引くことができない。この点は利用者がSerendyからのメールで推薦図書に興味を持ったかどうかなど、Serendyが実際に運用されどのような利用がなされているかを調査しなくてはならないと思われる。

また本研究のSerendyは3.2-2のように、発言自体に明示的に書誌情報が記述されているものからその言及された本を同定するという仕組みになっている。モデル(→3.1)として採用した事例と対応付ければ、会話の中で友人が発言の前提となった知識を与えた本に気づいてそれを言及するという事象において当該「言及」を再度繰り返すのがSerendyである。しかしそのような言及がなされる頻度は相対的に見てそれほど多くないであろうことを考慮すると、「発言の前提となった知識を与えた本」を友人の代わりに推定できればシステムはより効果を発揮しうるといえ、その意味でSerendyはモデル再現の中途にあるのである。

4.2 今後の展望

Serendyは現状においてWebアプリケーションとして最低限かつ簡素な作りとなっており、一般の利用に堪えるものとは言いがたい。新規登録時の負担緩和やユーザーページによる推薦図書リストの管理機能などが不足しており、またメール以外の通知手法も可能ならば取り入れるべきである。ただしこれらはWebアプリケーションとしての外形上の問題であって、内部で動作するプログラムとは位相を異にする。この点、内部プログラム(3.2-2)の動作原理に関して、4.1で言及した「発言の前提となった知識を与えた本」も推定できるものに更新していこうと考えている。

注

- 1) <https://twitter.com/>
アクセス日時：平成26年6月25日
- 2) <http://booklog.jp/>
アクセス日時：平成26年6月25日
- 3) <http://book.akahoshitakuya.com/>
アクセス日時：平成26年6月25日
- 4) 出版文化産業振興財団、「出版界スコープ現代人の読書実態調査」、『出版ニュース』、11月、2009、pp. 25-27
- 5) 複数回答が可能で、社会人では「仕事、家事、勉強が忙しくて本を読む時間がない」(38.1%)と「本を読まなくても不便はない」(36.2%)および「読みたい本がない、何を讀んでよいのかわからない」(34.3%)が、中高生は「本を読まなくても不便はない」(51.6%)と「読みたい本がない、何を讀んでよいのかわからない」(46.9%)および「勉強や部活が忙しく、本を読む時間がない」(40.1%)がそれぞれ上位3位を占める。ここで「本を読まなくても不便はない」のは読書に興味がないものとして、また「本を読む時間がない」ことについては当人に対する何らかの支援でもって解決する問題というよりは当人の置かれた環境およびそれを強いる社会制度等に起因する問題につき本研究の対象から除外した。
- 6) 根本彰、「情報・知識資源制度の構造」、『情報資源の社会制度と経営』、根本彰編、東京大学出版会、2013、pp. 1-45
- 7) Erdelez, S., "Information Encountering: It's More Than Just Bumping into Information," *Bulletin of the American Society for Information Science and Technology*, 25(3), 1999, pp. 26-29
- 8) 本来キュレーションは美術館等の所蔵物を一定の目的で再構成し企画展示するというキュレーター(学芸員)から派生した用語であるが、近年情報技術分野で「情報群を再構成すること」を指す用語として流行が見られ、本稿でもその意味で用いている。
- 9) 対象SNSを絞ることで開発を簡単にするため。なかでも本についての発言サンプル数が多く見込めるものとしてTwitterを選んだ。